

(2) 卸売市場価格の3年間の推移

福島県産の野菜・果物について、平成22年～25年における東京中央卸売市場における取扱量と、平均価格の同市場平均価格に対する割合を確認する。

品目は、アスパラ、インゲン、トマト、日本なし類、ブロッコリー、ピーマン、ミニトマト、いちご、モモ、なめこ、なましいたけ、きゅうり、ニラ、ほしがきの14品目（表記は東京中央卸売市場による）である。

各品目について、上段のグラフは、平成22～25年の4年間の東京中央卸売市場における福島県産取扱量(kg)、福島県産平均単価の同市場平均単価に対する割合(%)、そして福島県産取扱量が同市場取扱量に占める割合(%)を示す。下段のグラフは、福島県産取扱量(kg)と平均単価の割合(%)の月別の変化を表す。

価格変動には年次変化とともに、大きな月別変化がある。そこで全体の傾向を把握するために、まず年次変化について見る。

取扱量については、平成22年に比べて25年に増えたものは、トマト、ピーマン、ミニトマト、モモ、きゅうりの5品目、ほぼ同水準のものは、日本なし類とブロッコリーの2品目、減ったものは、アスパラ、インゲン、いちご、なめこ、なましいたけ、ニラ、ほしがきの7品目であり、そのうちなましいたけは出荷制限が行われ、ほしがきは加工自粛の経緯がある。このように、半数の品目が平成22年の水準に戻っている。

価格については、ほぼすべての品目が前年度より上昇し、ミニトマト、なましいたけ、きゅうり、ニラの4品目は平成22年の水準に戻っている。しかし、残りの10品目は平成22年の水準に戻っていない。

次に、月別の変化を見ると、平成25年の年間最高価格が平成22年度の最高価格にほぼ戻っているのはアスパラ、インゲン、トマト、日本なし類、ピーマン、ミニトマト、モモ、なましいたけ、ニラ、ほしがきの10品目である。ただし、なましいたけとほしがきは出荷量が少量である。他方、平成22年度の最高価格に比べて平成25年の最高価格が1割以上低い品目はブロッコリー、いちご、ナメコ、きゅうりの4品目である。

ほしがきについては、平成23年10月14日から平成25年冬の出荷再開まで主産地が加工自粛した経緯があるため、取扱量はほとんどない。

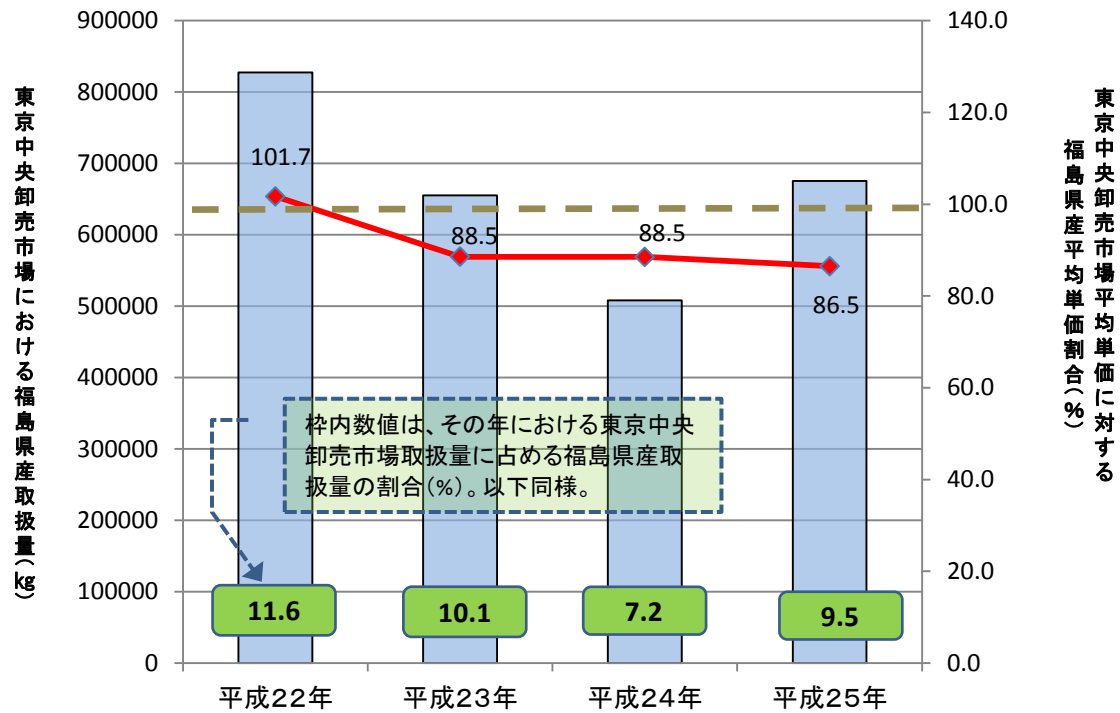
平成23年の加工自粛地域は、伊達市・桑折町・国見町・福島市・南相馬市であり、加工可能地域はその他の20市町村（二本松市・本宮市・大玉村・郡山市・須賀川市・鏡石町・石川町・古殿町・三春町・棚倉町・塙町・鮫川村・会津若松市・喜多方市・会津坂下町・会津美里町・相馬市・広野町・新地町・いわき市）、平成24年の加工自粛地域は、福島市・二本松市・伊達市・桑折町・国見町・川俣町・広野町、加工可能地域はその他の30市町村、平成25年の加工自粛地域は、福島市・伊達市・桑折町・国見町・南相馬市、加工可能地域はその他の31市町村である。平成23年11月の福島県産取扱量は18kg、平成24年同月は

368kg、平成 25 年同月は取扱いなしである。

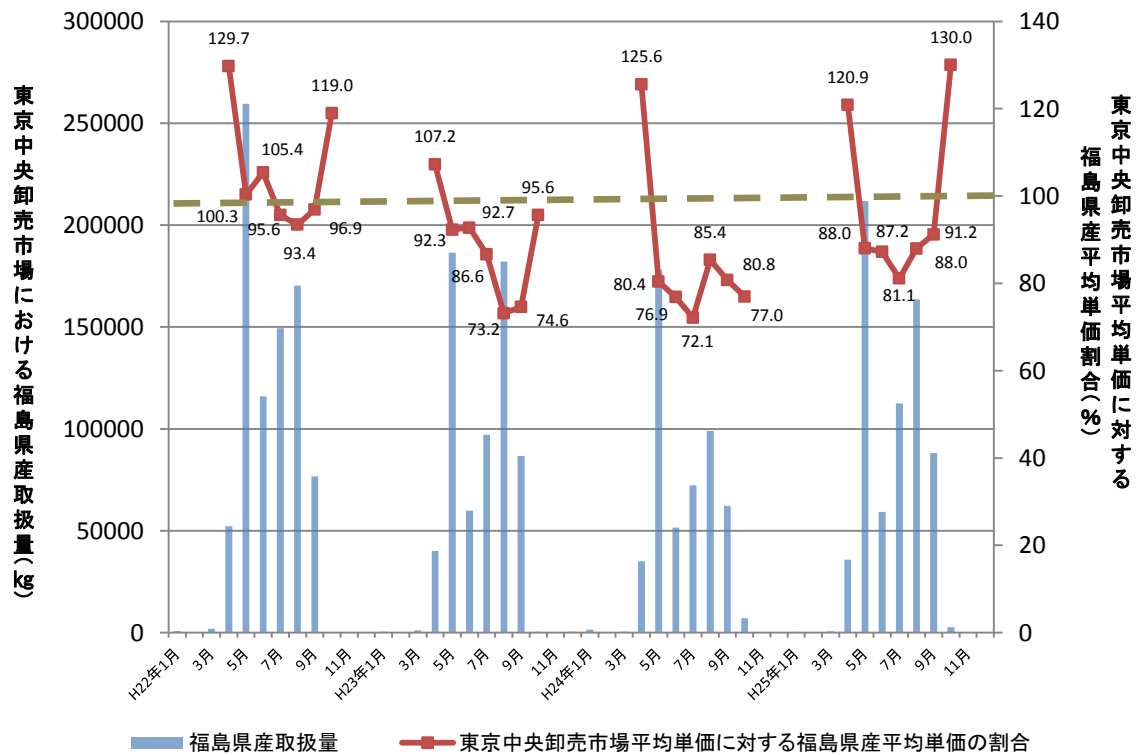
価格形成には取引量だけでなく天候や競合産地の動向など多くの要因が関係するが、平成 22 年に比べて平成 23 年と平成 24 年の価格は低い品目が大部分だった。放射線量は基準値以下であり、安全性には問題がないことは明確なので、これは風評被害の結果と考えられる。特に、平成 24 年は、取扱量も平成 22 年から減少した平成 23 年よりさらに減少した上に、市場平均単価に対する割合も低下している。取引量が多かったものまでもが福島県産単価の割合が低く、平成 24 年の価格下落が極めて厳しいものだったことがわかる。

価格は平成 25 年には回復が見られるが、まだ平成 22 年の水準に戻っていない。これは、風評被害が少なくなっているが、まだ終わってはいないことを示すものと考えられる。

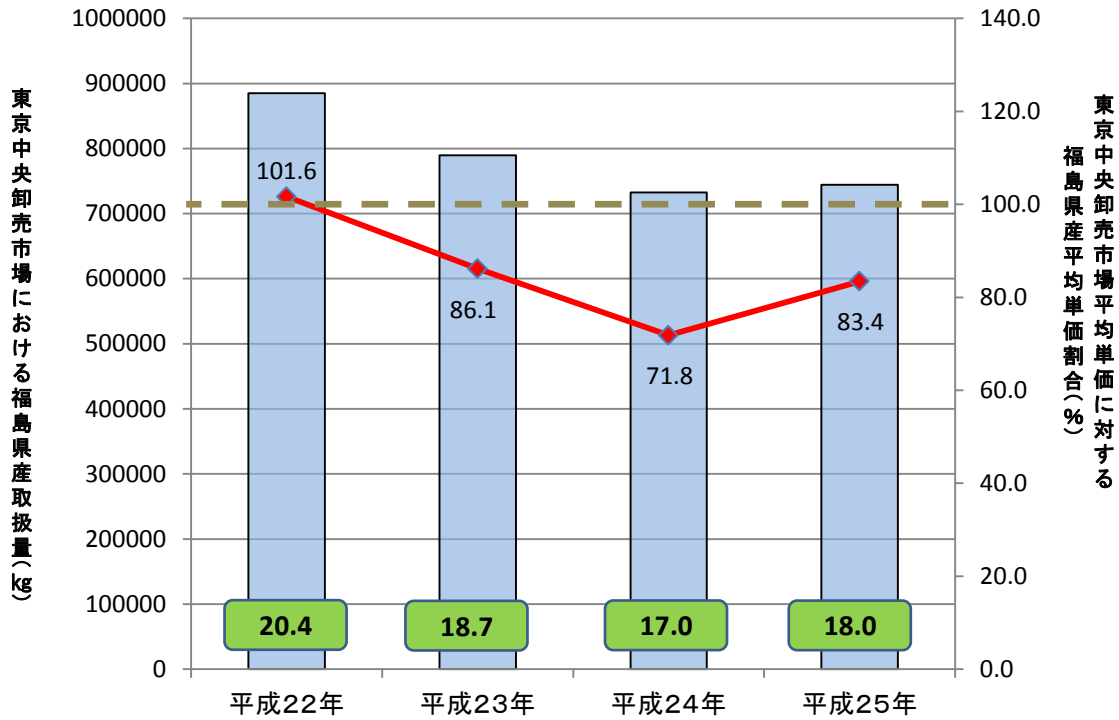
東京中央卸売市場における福島県産平均単価の割合と福島県産取扱量(年別)
【アスパラ】



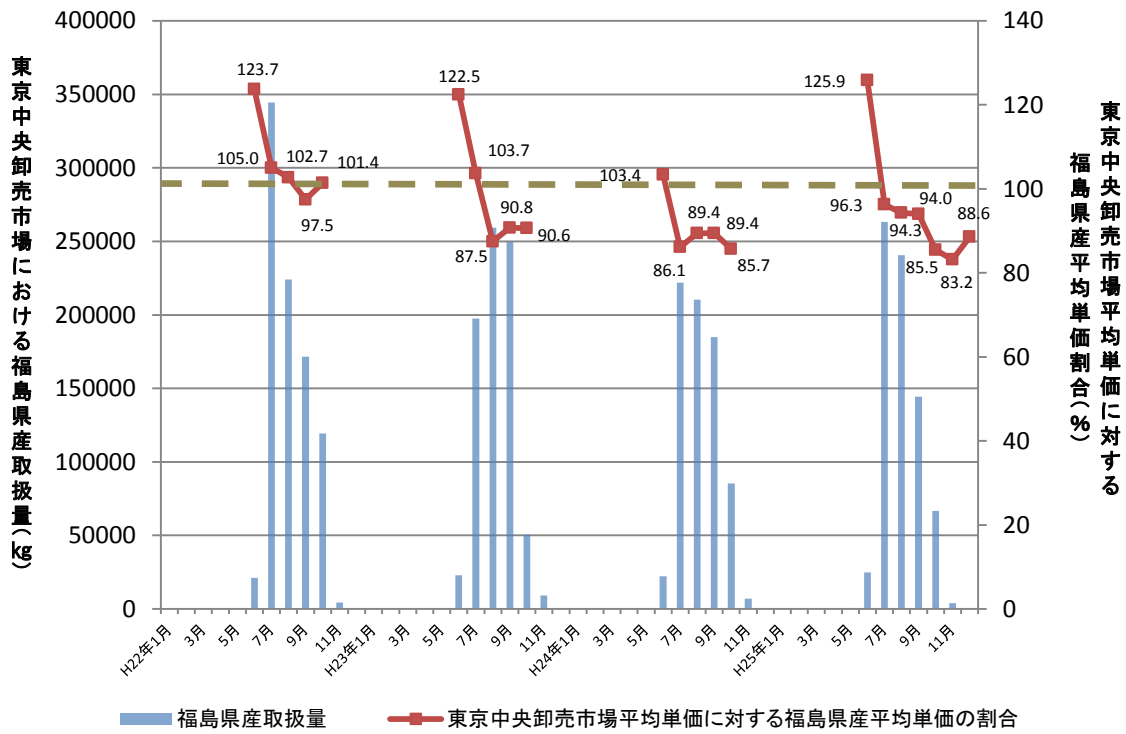
【アスパラ】
東京中央卸売市場における福島県産平均単価の割合と福島県産取扱量(月別)

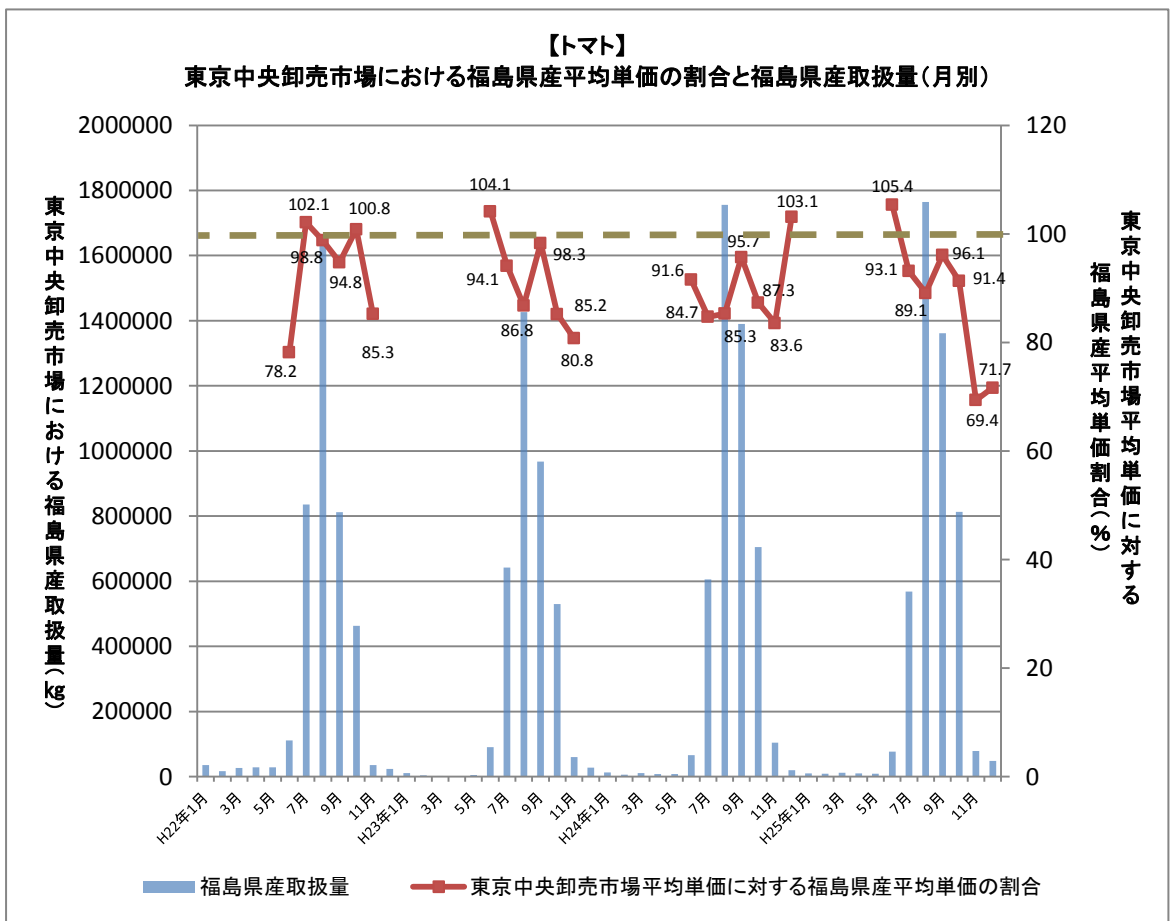
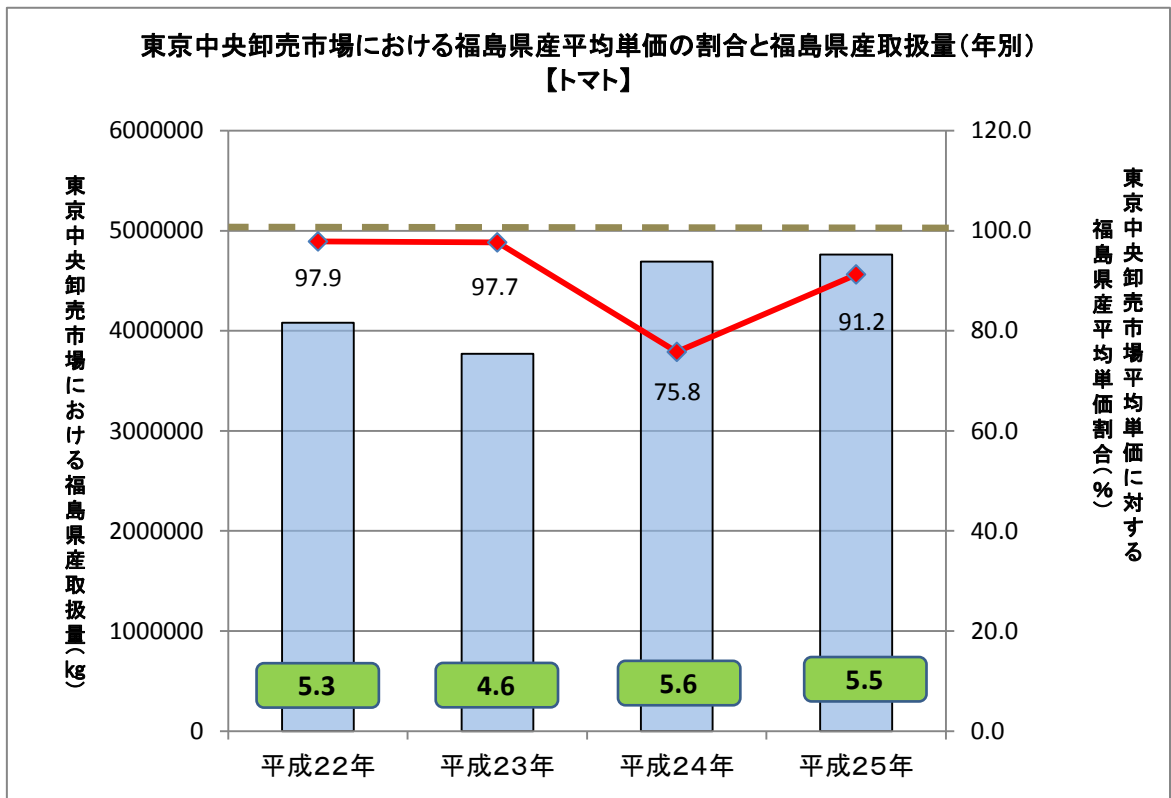


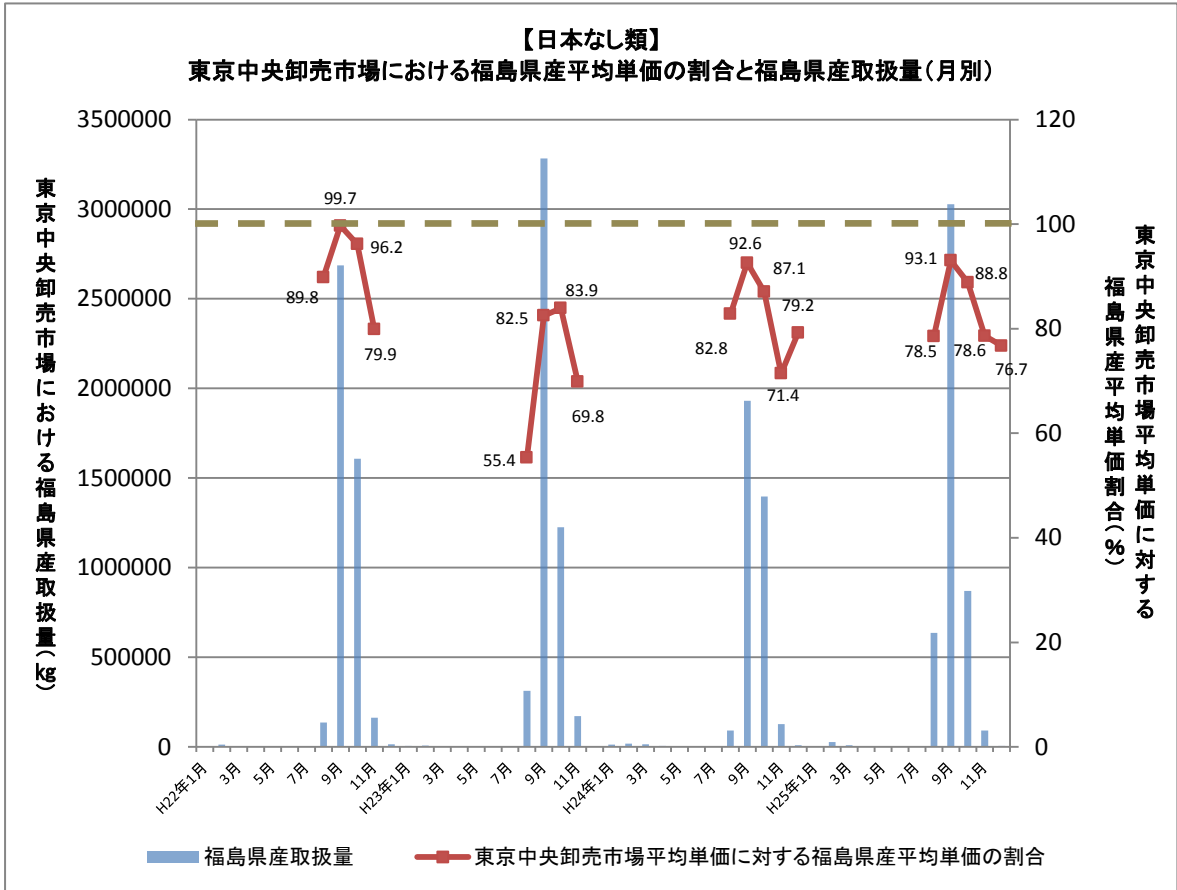
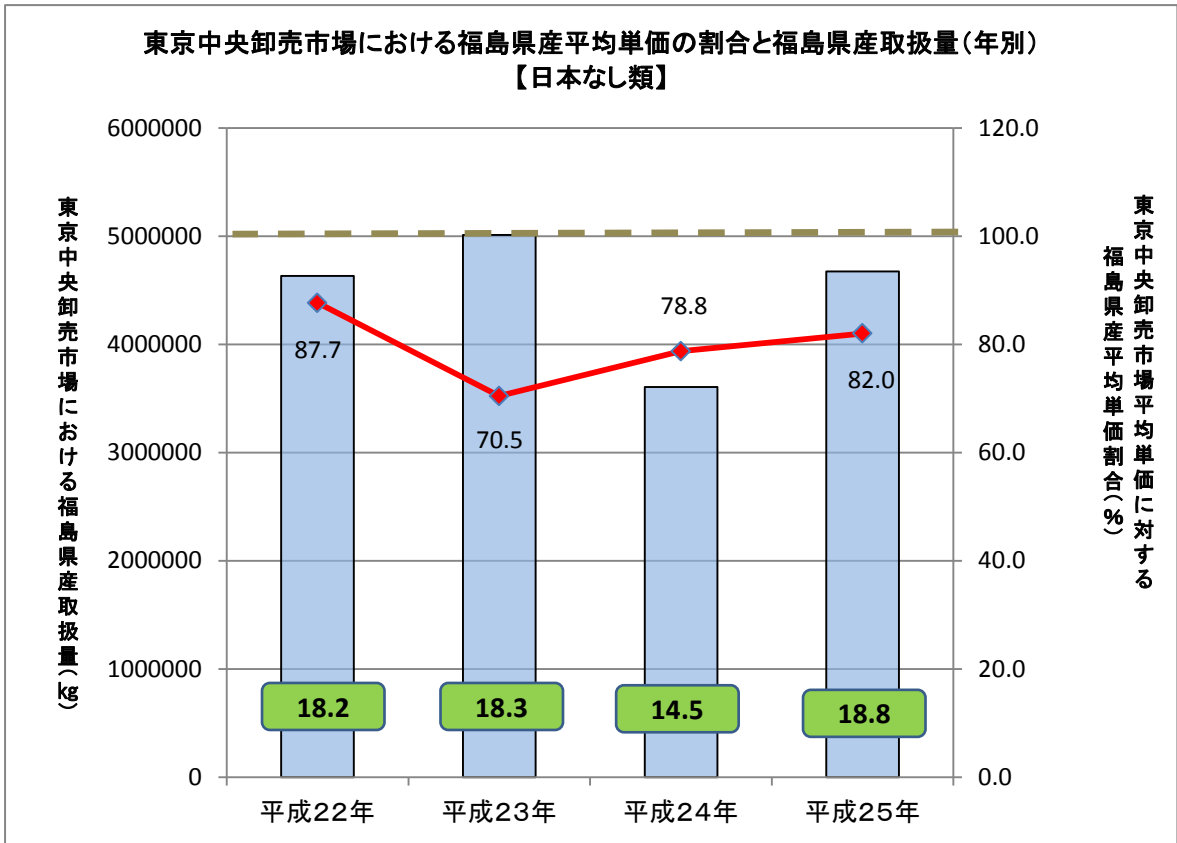
東京中央卸売市場における福島県産平均単価の割合と福島県産取扱量(年別)
【インゲン】



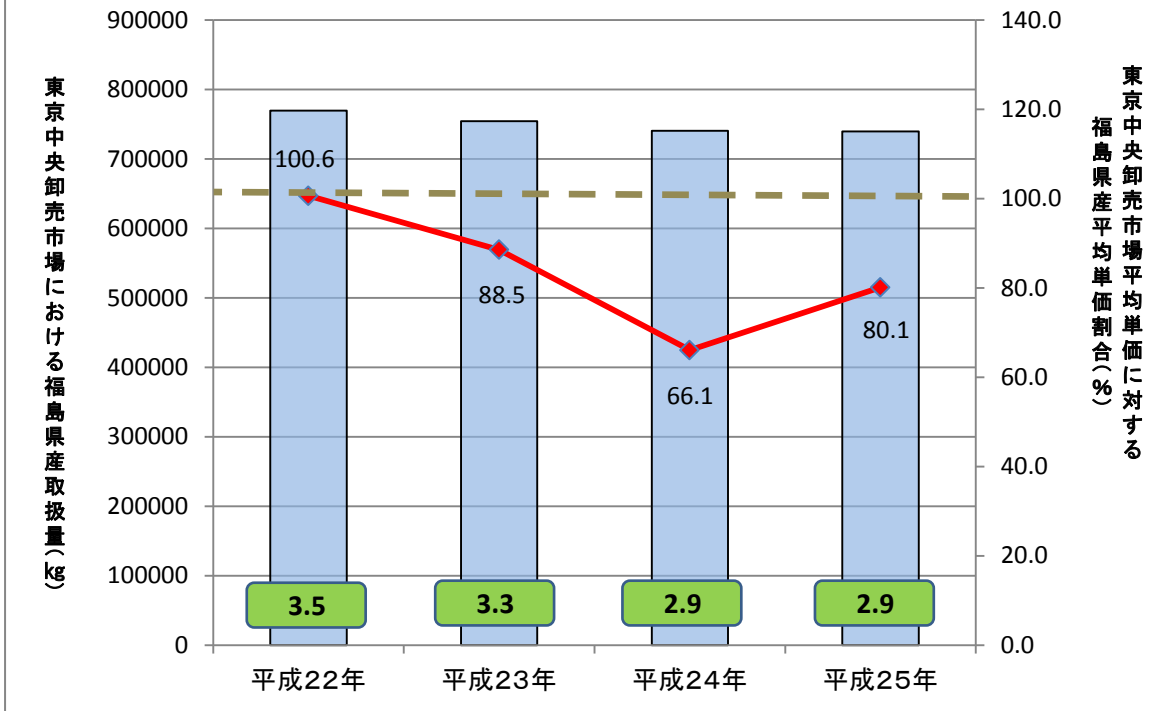
東京中央卸売市場における福島県産平均単価の割合と福島県産取扱量(月別)
【インゲン】



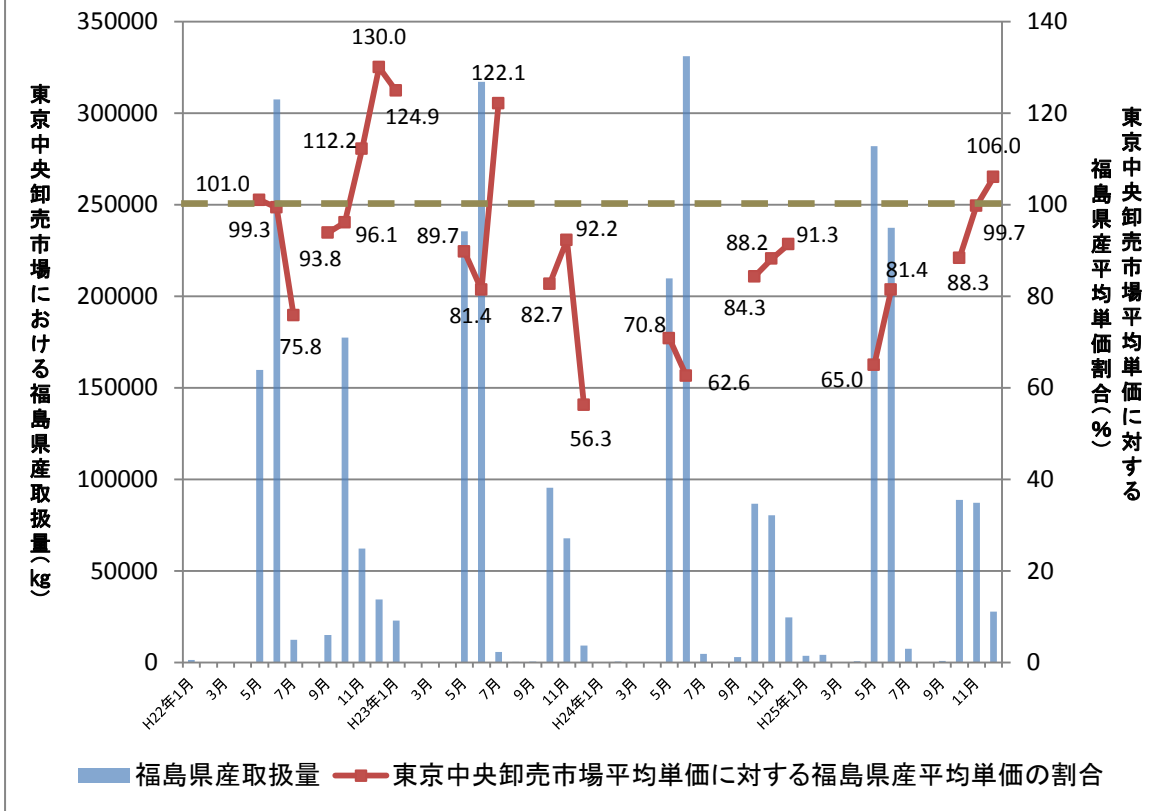




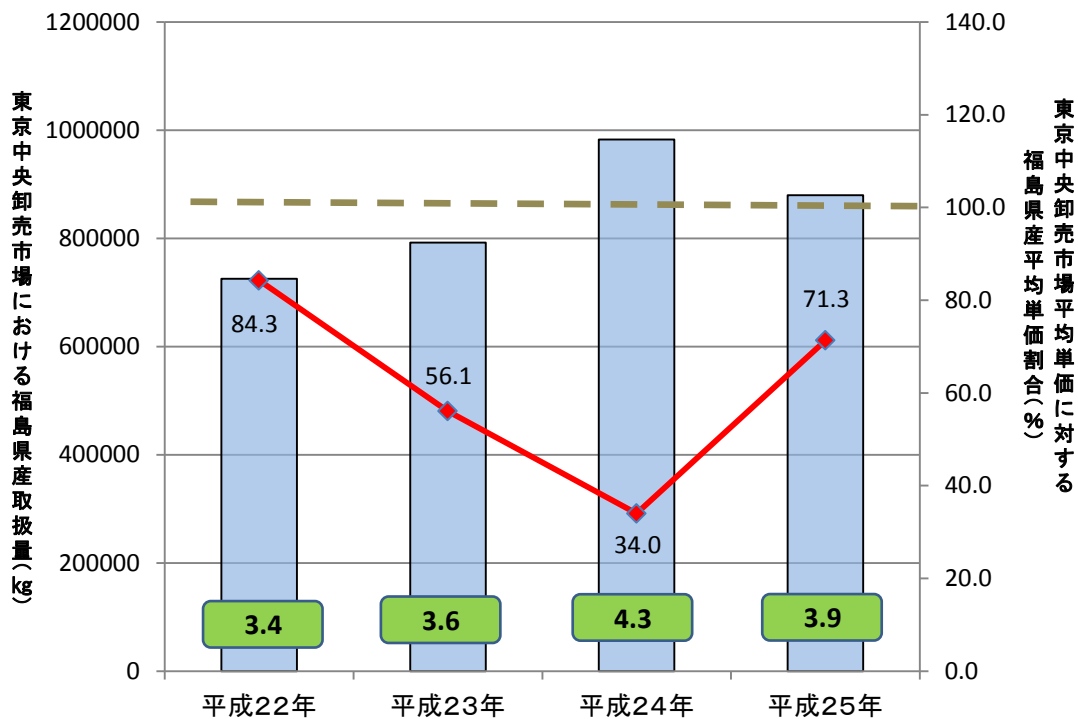
東京中央卸売市場における福島県産平均単価の割合と福島県産取扱量(年別)
【ブロッコリー】



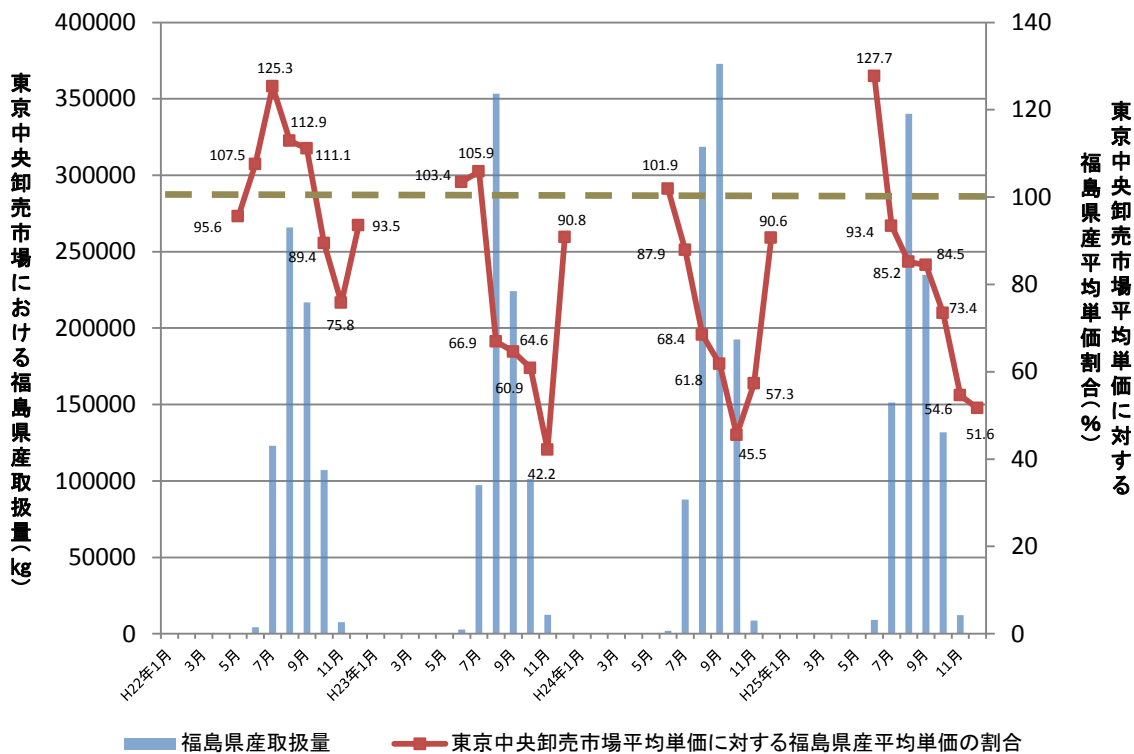
東京中央卸売市場における福島県産平均単価の割合と福島県産取扱量(月別)
【ブロッコリー】

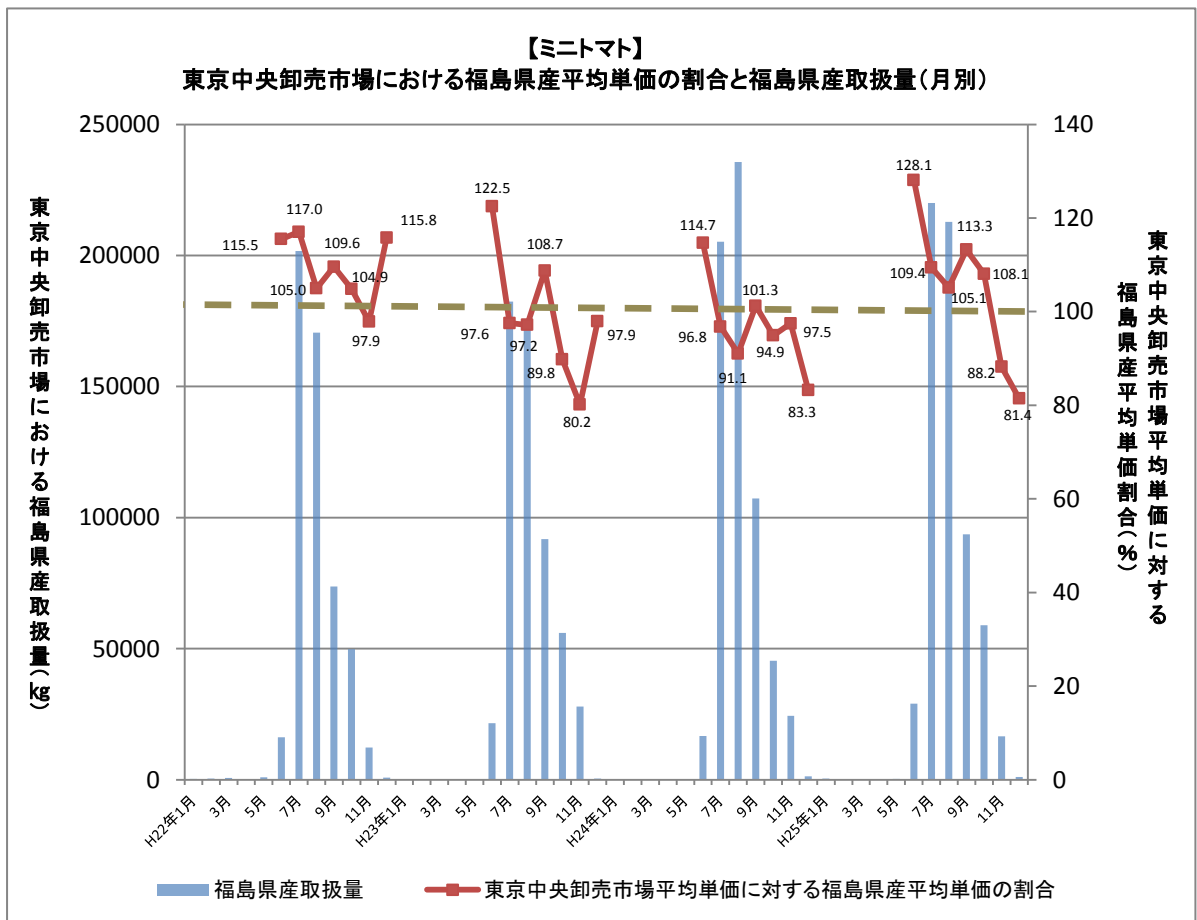
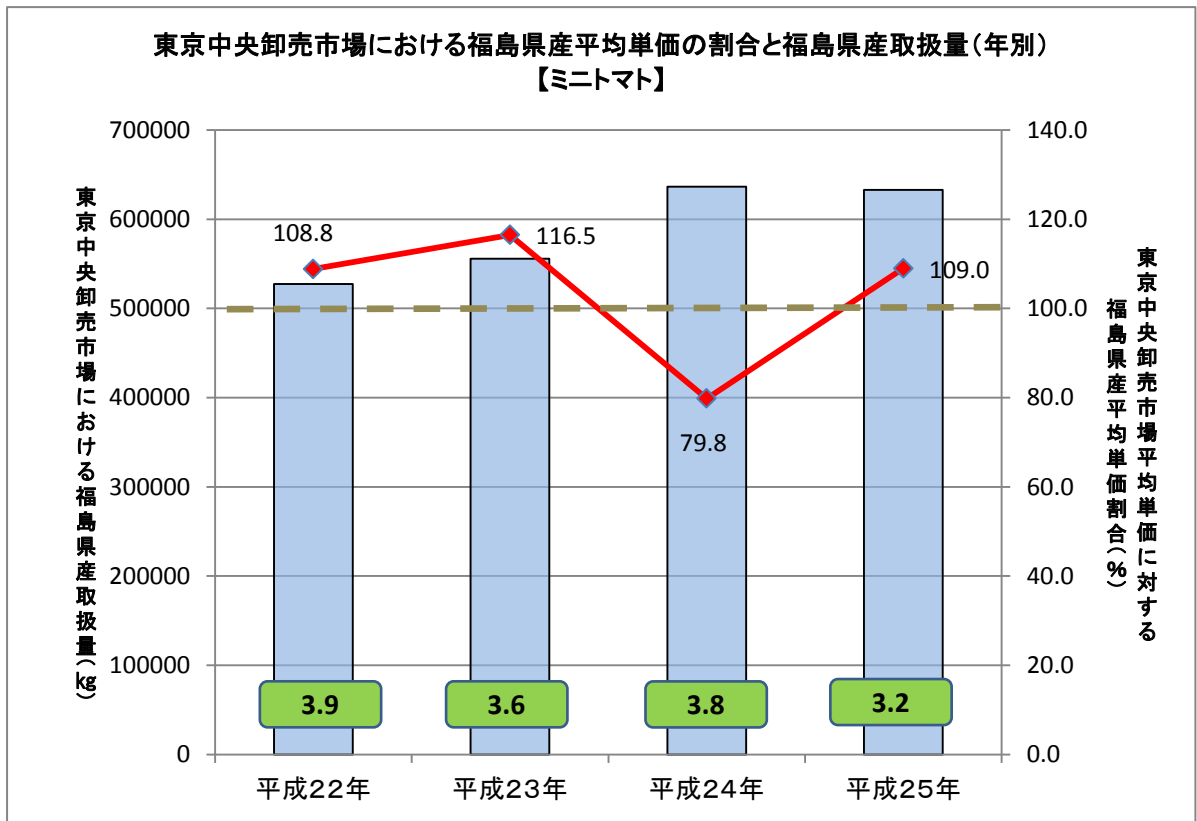


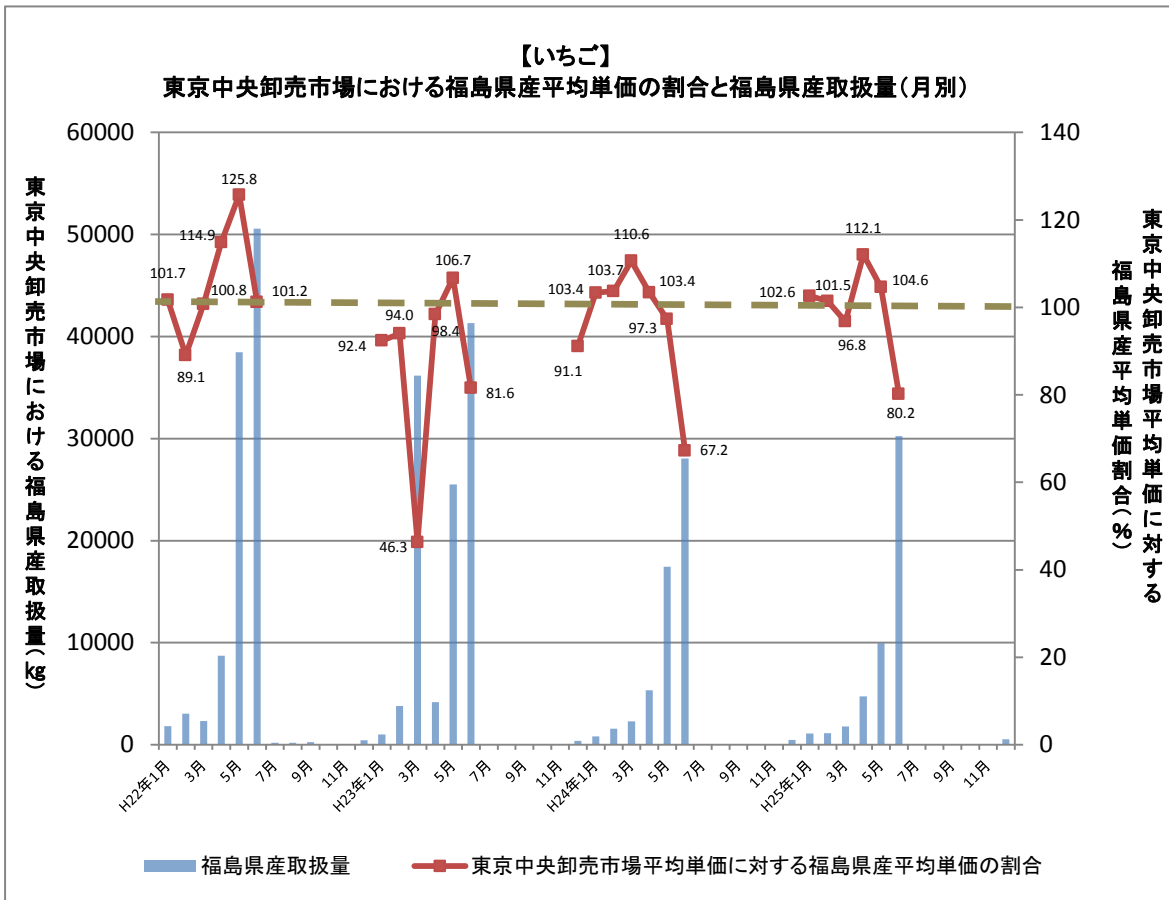
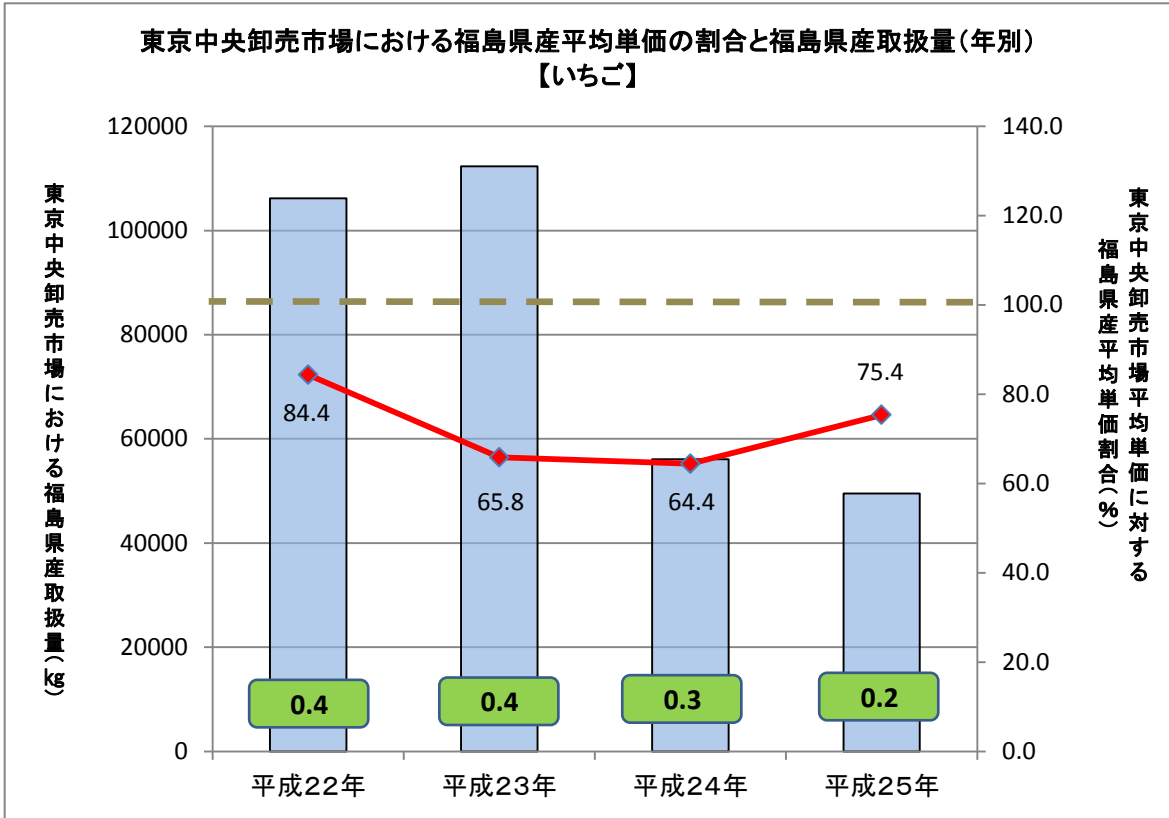
東京中央卸売市場における福島県産平均単価の割合と福島県産取扱量(年別)
【ピーマン】

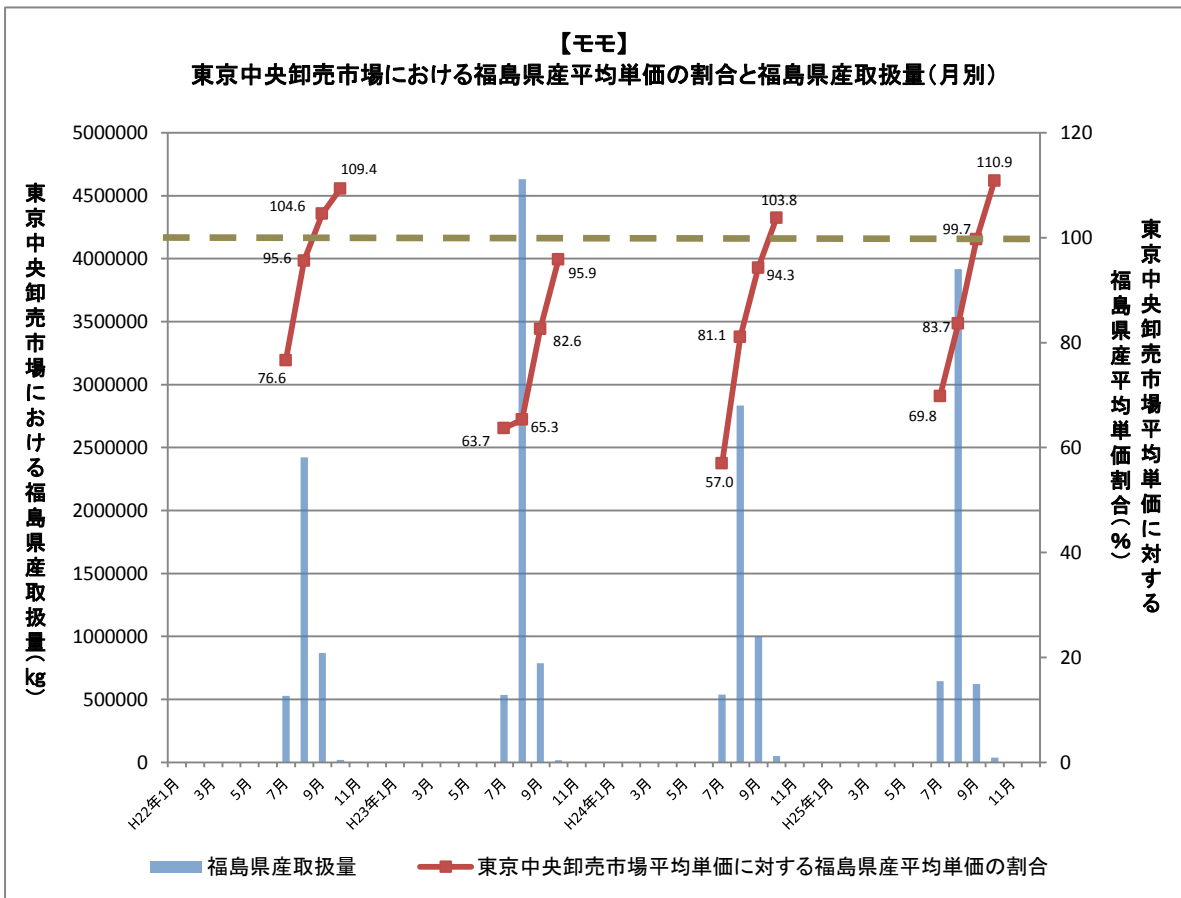
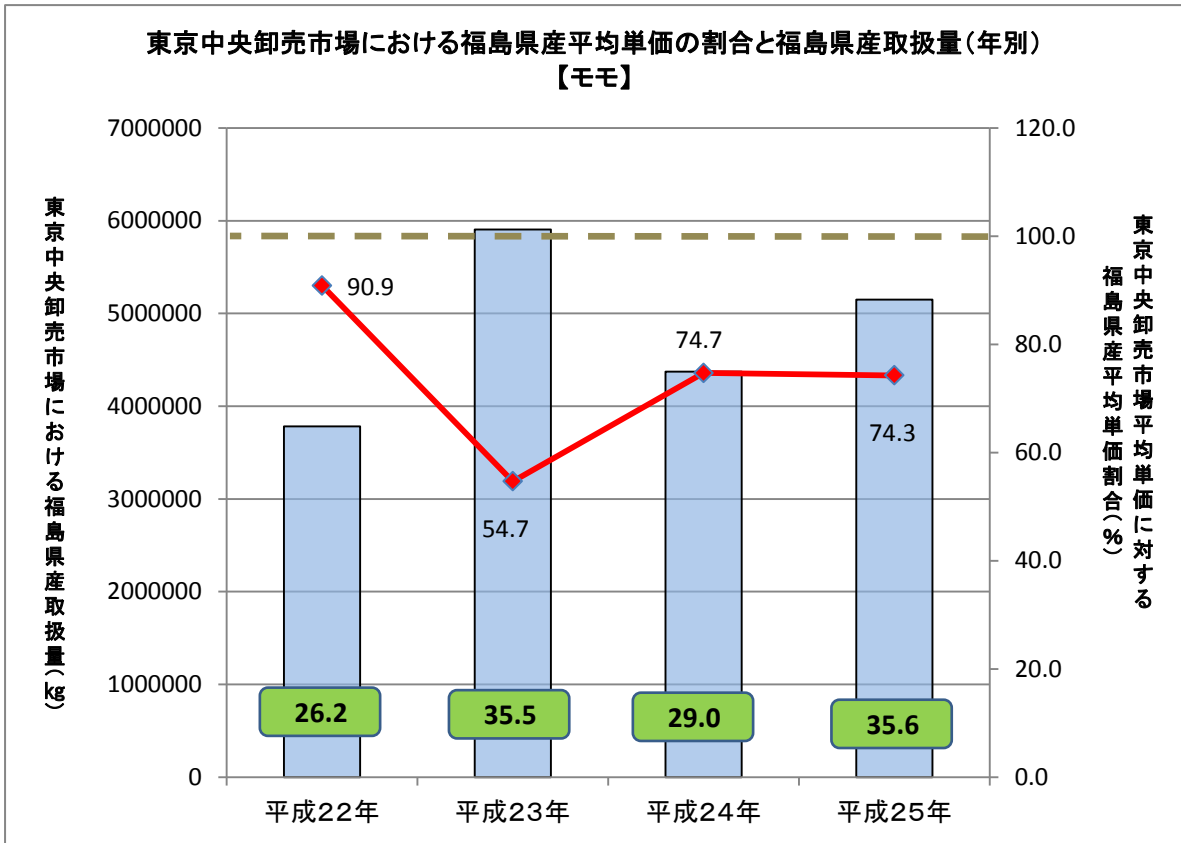


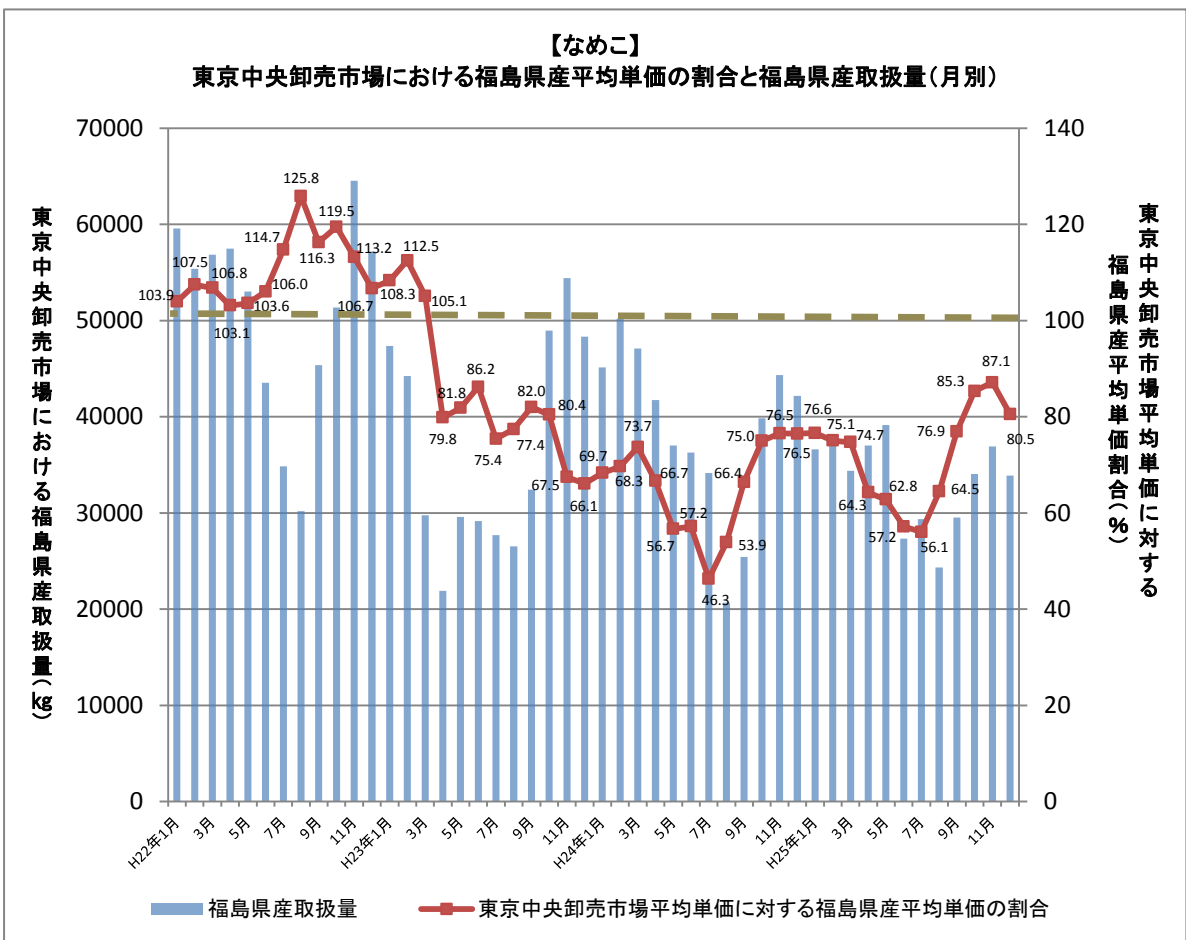
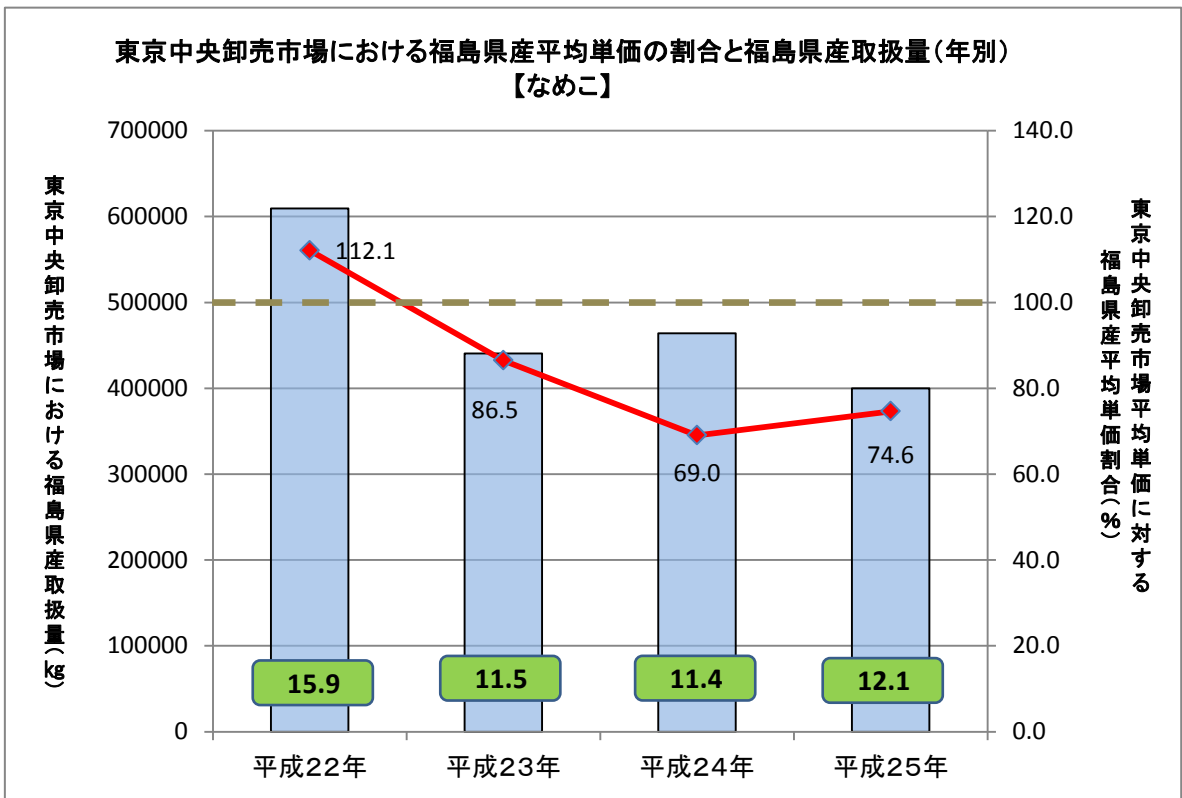
東京中央卸売市場における福島県産平均単価の割合と福島県産取扱量(月別)
【ピーマン】



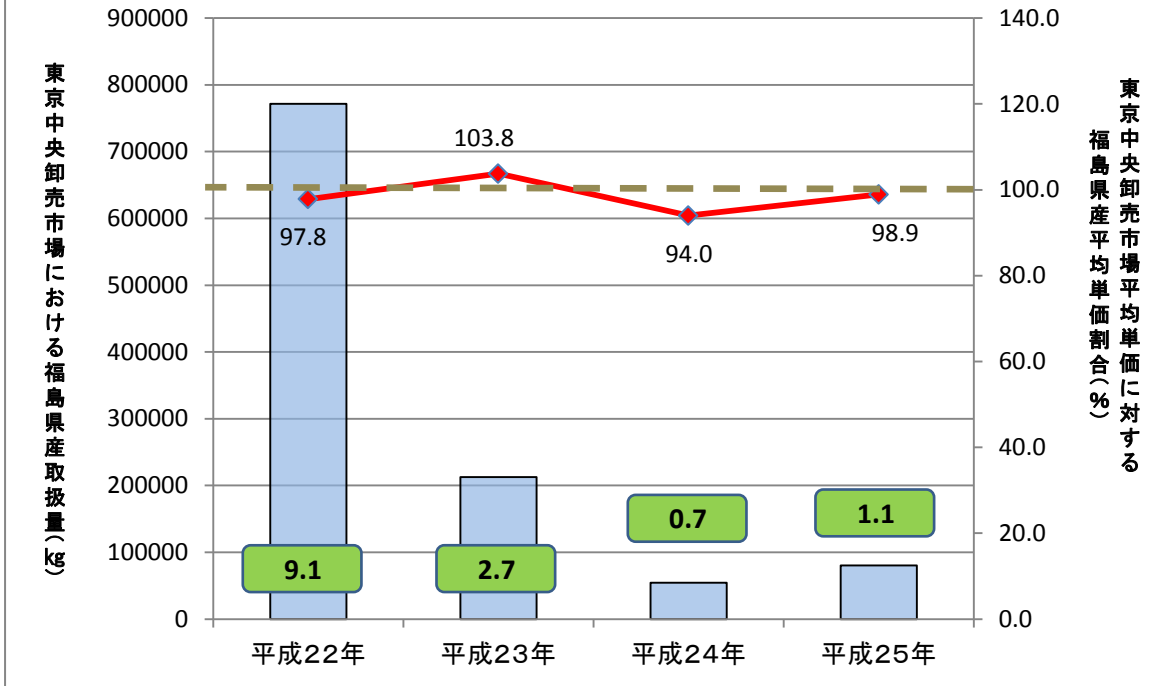




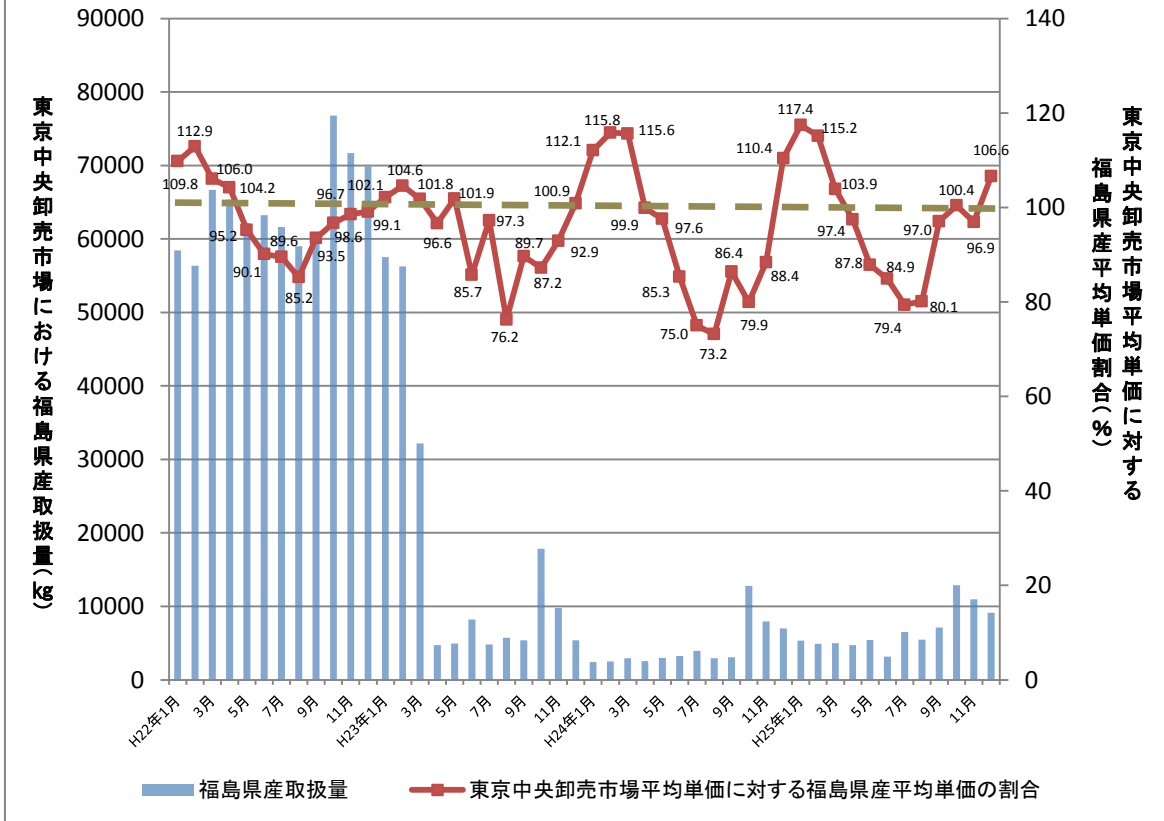




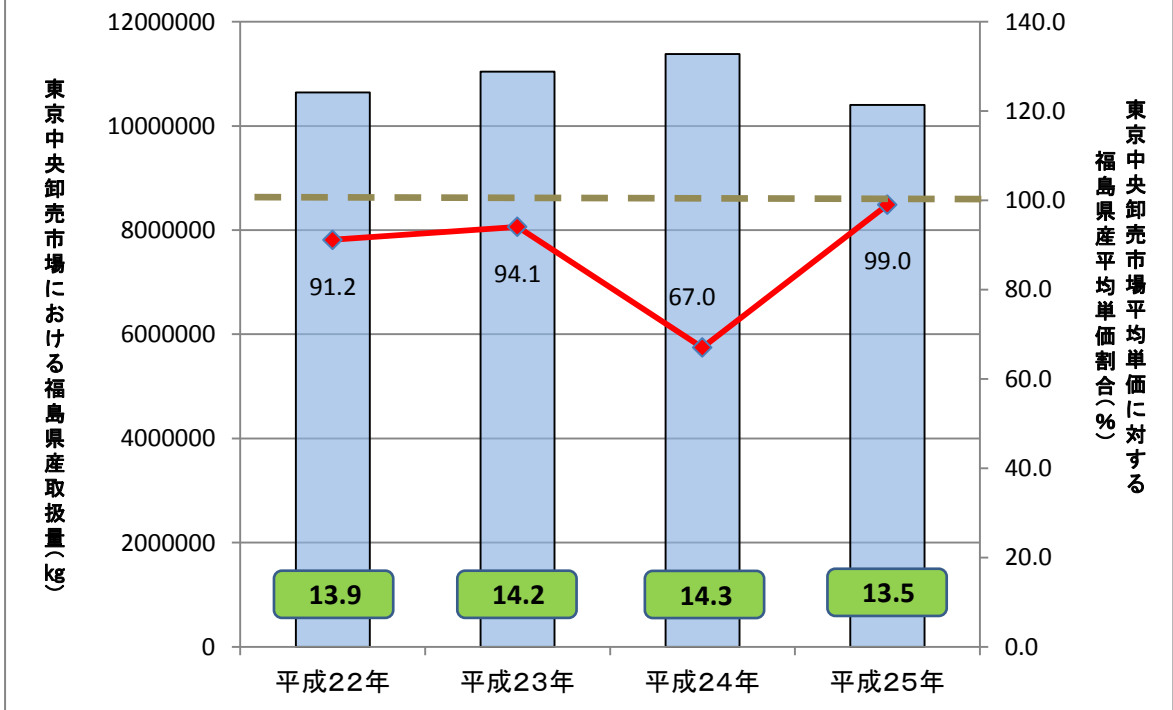
東京中央卸売市場における福島県産平均単価の割合と福島県産取扱量(年別)
【なましいたけ】



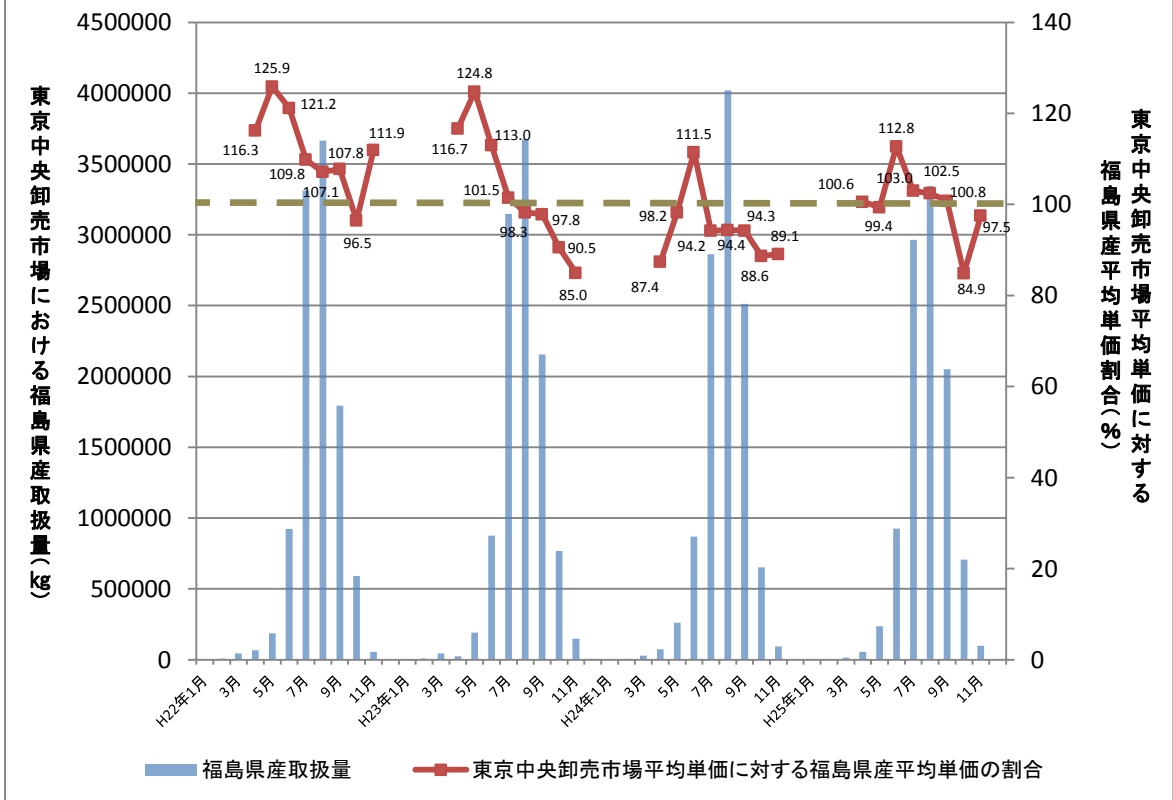
【なましいたけ】
東京中央卸売市場における福島県産平均単価の割合と福島県産取扱量(月別)



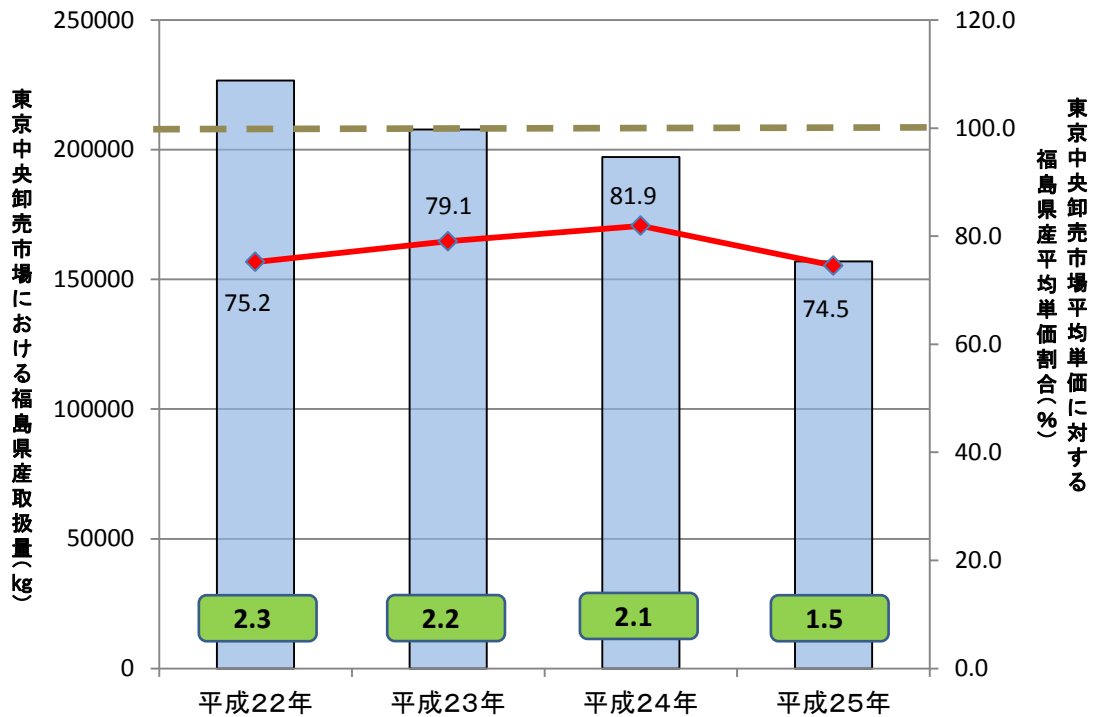
東京中央卸売市場における福島県産平均単価の割合と福島県産取扱量(年別)
【きゅうり】



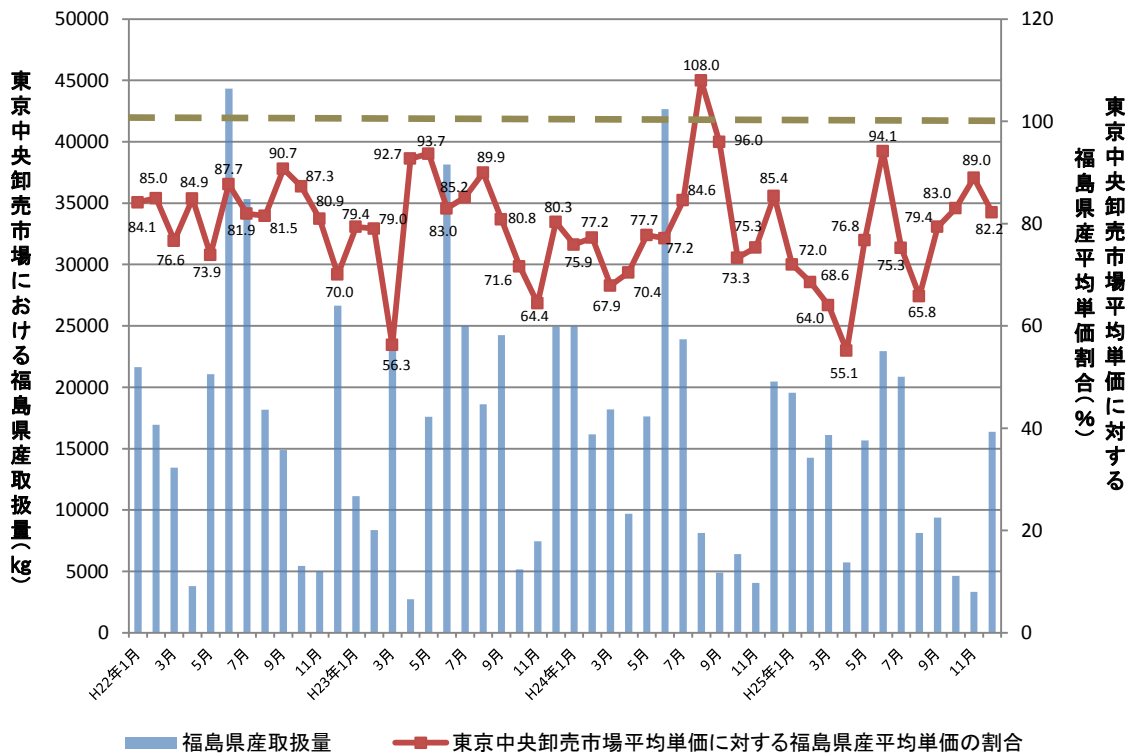
東京中央卸売市場における福島県産平均単価の割合と福島県産取扱量(月別)
【きゅうり】

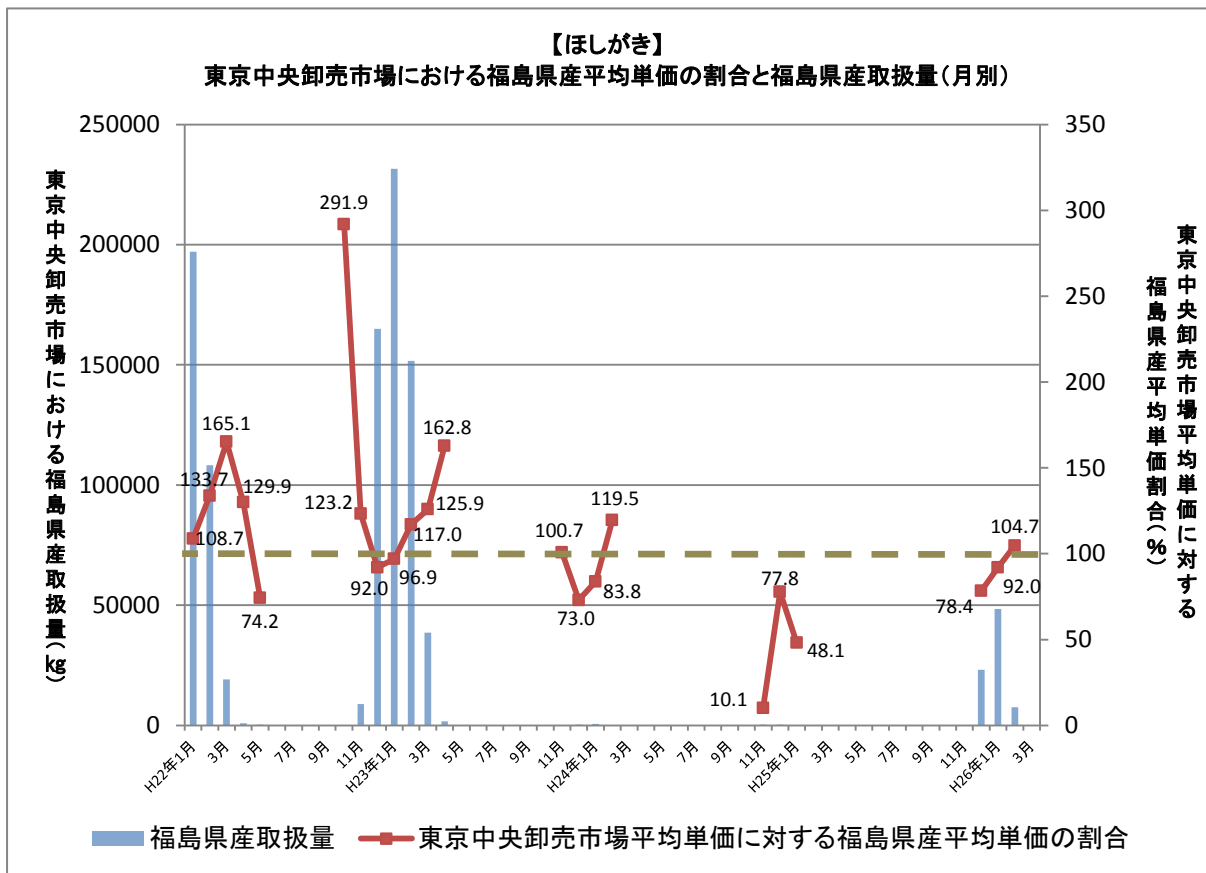
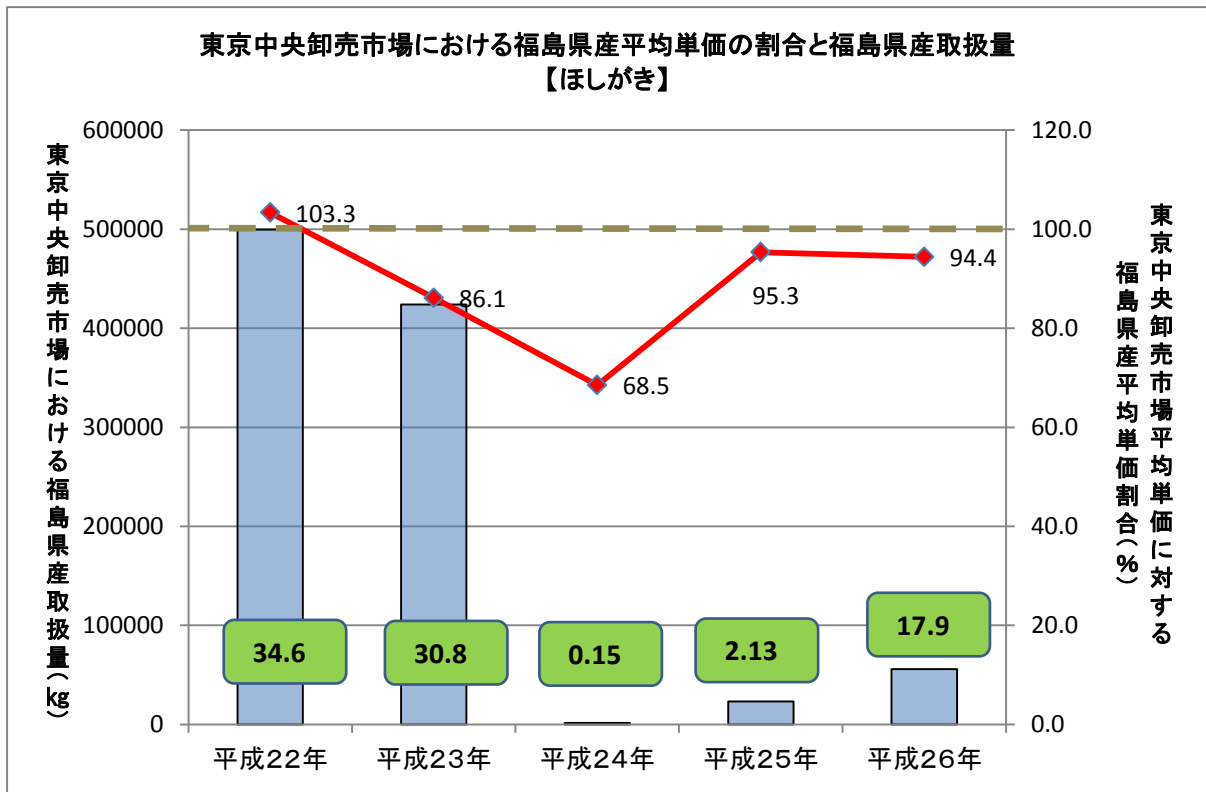


東京中央卸売市場における福島県産平均単価の割合と福島県産取扱量(年別)
【ニラ】



東京中央卸売市場における福島県産平均単価の割合と福島県産取扱量(月別)
【ニラ】





出典) 東京中央卸売市場データ

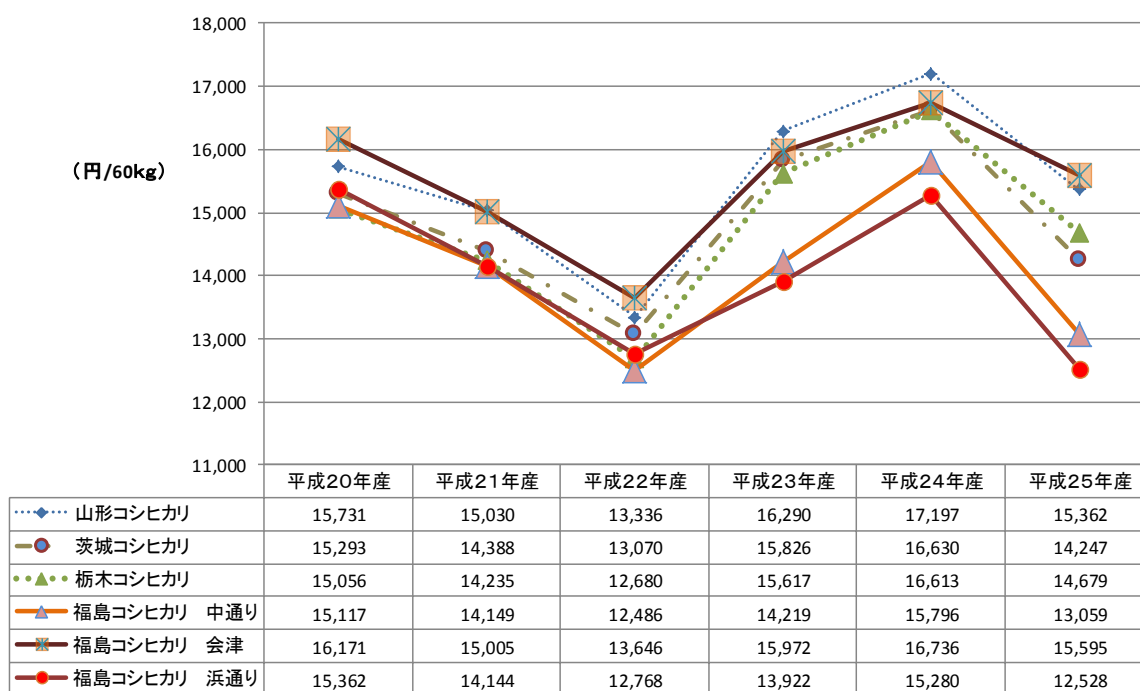
福島県産米の相対取引価格の平成20年産から平成25年産までの推移を確認しておく。ただし、各年の価格は月別価格の単純平均であり、また平成25年産の福島コシヒカリ浜通りは3月分のみの価格データであることから、全体的な傾向として捉えておくことにする。

福島会津は、平成20年産・21年産では他県よりも高く推移し、平成22年においても下落しているものの、その度合いは小さい。そして、平成23年産・24年産では山形コシヒカリより低く推移しているが、平成25年産では他県よりも高い水準である。

一方、福島中通り・浜通りは、平成23年における前年の下落からの回復度合いはそれぞれ1,733円と1,154円となっており、会津の回復度合い2,326円と比較して低く、また平成24年産の価格上昇度も低く推移している。平成25年の下落幅についても、他県や会津より大きい。

米についての全体的傾向としては、会津は回復しつつあるが、中通り、浜通りについては、未だ回復の兆しが見られないことがわかる。

福島県産米の相対取引価格(出荷業者) (主食用1等、円/60kg)



注1: 平成20年産から平成25年産までの相対取引価格は、各月の単純平均である。

注2: 平成25年における福島浜通りの相対取引価格は、3月分のみである。

出典) 農林水産省生産局農産部農産企画課